

西洋は日本の美意識をどういう風に見ていたのか

Martin, TIRALA

日本研究は誰のものかという質問に対し、日本研究は日本人の研究者のものだと答える人が多いだろう。日本人は日本語で書かれた資料を最も正しく読め、そして数百年の日本研究の伝統があり、殆どの専門的な議論は日本において行われている。一方、日本を研究テーマとして扱っている西洋の研究者の業績も無視できない。ヨーロッパとアメリカの研究者は日本を外から違った視点で見ているため、様々な物事に日本人より気付くと言う人もいる。また、欧米の研究者は中国、韓国など、東アジアの国と違う文化圏の観点で見ているので、まったく異なったパラダイムに絡め考えている。しかしながら、本当にそうなのだろうか。

西洋あるいは欧米の研究者の日本研究はどのような過程を経たのか、どんな枠組みで行っていたのかと考えた時に、具体的な例を出し検討すると、大まかな姿が現れてくると思う。長い鎖国時代に終わりを告げた明治維新以降、新しく作られた日本帝国の政府は相次いで西洋から新しいアイディアや制度などを取り入れた。1880年代、恐らく1886年に取り入れたものの中に美学という新しい学問があるが、これは不思議だ。なぜなら、ヨーロッパやアメリカの大学には美学という独立した学科はまだ存在していなかったからだ。美学が初めて哲学から学問として分類されたのは日本だった。しかし、西洋の学問の一つとして扱われたため、日本人の美学の専門家は西洋美学のみを研究していた。欧米の諸言語の美学専門用語を日本語に翻訳し、主にドイツやフランスのディスコースの影響を受け、西洋の概念をそのまま受け入れ、美学の研究を始め、現在に至る。日本の美学者は基本的にカントやヘゲル等の美学の研究に力を注いでいるが、明治時代以前の日本の美意識にあまり目を向けていない。それは佐々木健一の「美学への招待」という入門書中の言葉でもわかる。

「学問としての美学とは、十八世紀中葉にヨーロッパで確立した、美と芸術と感性を論ずる哲学です。わたくしが読者をその入り口に案内したいと考えているのは、このような学問としての美学です。本書では主として芸術を取り上げますが、それは、西洋の美学の主流が芸術哲学であったこともさりながら、読者の関心がそこにあるだろう、と考えてのことです。」(佐々木健一『美学への招待』)

一方、欧米は昔から日本の伝統的な美意識に深く興味を持っている。しかしながら、九鬼周造の『『い

き』の構造』以外、日本の現代美学の研究を全て無視し、茶道・日本庭園・俳句等の伝統的な美意識のみに魅せられている。このようなオリエンタリズム的興味は19世紀後半に生まれた。西洋で行われている日本の美意識の研究は、今日までオリエンタリズムの呪文で縛られていると言えるだろう。大正と昭和の日本の文化人もこのステレオタイプの考えを消し去りたくなかったようだ。1930年代、鈴木大拙はアメリカに禅の教えとともに「わび」と「さび」を紹介した。またその頃、1933年に、谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」で日本の美の概念を述べている。

「ぜんたいわれわれは、ピカピカ光るものを見ると、心が落ち着かないのである。西洋人は食器などにも銀や鋼鉄やニッケル製のものを用ひて、ピカピカ光る様に研き立てるが、われわれはああ云ふ風に光るものを嫌ふ。われわれの方でも、湯沸しや、杯や、銚子等に銀製のものを用ひることはあるけれども、ああ云ふ風に研き立てない。却って表面の光りが消えて、時代がつき、黒く焼けて来るのを喜ぶのであつて、心得のない下女などが、折角さびの乗つて来た銀の器をピカピカに研いたりして、主人に叱られることがあるのは、何処の家庭でも起る事件である。」(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』)

「われわれの好む色が闇の堆積したものなら、彼等の好むのは太陽光線の重なり合った色である。銀器や銅器でも、われらは錆の生ずるのを愛するが、彼等はさう云ふものを不潔であり非衛生的であるとして、ピカピカに研き立てる。部屋の中でも成る可く隈を作らないやうに、天井や周囲の壁を白つぼくする。庭を造るにも我等が木深い植ゑ込みを設ければ、彼等は平らな芝生をひろげる。」(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』)

谷崎の独特な美感は、徳川時代に根付いた美感に近いものであり、日本語が読める西洋の研究者に、そして英語に翻訳された1970年代からの欧米の美学者に、大きな影響を与えた。西洋では、日本の美意識と日本の美学イコール「わび・さび」となってしまったのである。日本人の美学者が和の美意識を無視していたころ、ドナルド・キーンは吉田兼好の『徒然草』などの文学作品を踏まえながら、日本の美の特徴を谷崎よりの確に言い表していたのではないだろうか。その美の特徴を纏めると、つぎの四つ特徴に分けられる。

① 暗示 (suggestion)

これに関して徒然草の百三十七段を参照しよう。

「万の事も、始め終わりこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなくあはれなり。」(吉田兼好『徒然草』百三十七段)

吉田兼好は満月より、待ちに待ってやっと出てきた、明け方近くの月のほうを高く評価している。男女間の恋愛でも、ただ逢って契りを結ぶことは興味深い恋愛ではない。まだはっきりしていない恋愛のほうが面白いと言っている。言い換えれば、これから何かを期待する、あるいは、終わりが訪れる情け、何かを暗示している心は当時の日本人の心に近かったらう。

② 不規則 (irregularity)

「すべて何も皆、ことのとのほりたるはあしき事なり。し残したるを、さてうち置きたるは、面白く、いきのぶるわざなり。内裏造らるるにも、必ず造り果てぬ所を残す事なりと、或人申し侍りしなり。先賢のつくれる内外の文にも、章段の欠けたる事のみこそ侍れ。」

このように、未完成・不規則は、完成した規則的なものより品がよいと兼好が八十二段で述べている。

③ 単純 (simplicity)

「よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしききらかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは、ながらへ住むべき。」(吉田兼好『徒然草』十段)

「人はおのれをつづまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世をむさぼらざらんぞいみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。」(吉田兼好『徒然草』十八段)

吉田兼好はこのように、ものが沢山あるより、質

素な生活をしたほうがいい、豪華な物よりシンプルな物に囲まれたほうがいいと言っている。

④ はかなさ (perishability)

「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしきと人の言ひしに、頓阿が、羅は上下はつれ、螺細の軸は貝落ちて後こそいみじけれと申し侍りしこそ、心まさりて覚えしか。」

最後にドナルド・キーンは、この八十二段で、日本の美の特徴として、物事のはかなさを紹介している。しかし、ドナルド・キーンが書き記している全ての日本の美の特徴は中世の「わび・さび」の美意識に近いものである。日本の美意識をこのように一般化し総括する傾向は日本映画の研究の先駆者であるドナルド・リリーの研究にも見られる。リリーは、西洋映画の中に、代表的なエトス (representational ethos) があるのに対して、日本映画の中には、表象的なエトス (presentational ethos) があると述べている。代表的なエトスというのは、簡単に言えば、リアリズムのことで、表象的なエトスは演劇的な描写のことだと説明している。リリーは、日本の映画は基本的にリアリズムから離れ、全く演劇くさを隠そうとしていないと言っている。戦前の映画や戦後の溝口の映画を見ると納得できるだらう。しかし、全ての日本の監督がそうだとは言えない。そのため、日本の美意識が単純化されていると批判している専門家もいるが、キーンとリリーは日本人研究者ができなかったことに成功したと言えるだらう。若しくは、ある時代の美の特徴を見せたと言ってもよいだらう。

日本では日本の美意識を総括する美学者は殆どいない。今道友信の『東洋の美学』(1980)はこの点で例外だと思ってもいいだらう。「あはれ」・「ものあはれ」・「をかし」・「幽玄」等の美的概念を個別に研究する人は少なくもない。しかし美学者ではなく、古典文学を研究する専門家のおかげで、それぞれの美意識の元々の意味が分かるようになってきている。西洋でも同じく日本の美意識の基礎研究は文学の研究を専門にした人がしている。そして1990年代から、特にミケーレ (マイケル)・マルラが活躍し、日本の現代美学が知られるようになったため、西洋の研究者は日本の美意識あるいは美学を少しずつ理解し始めている。マルラの主な著書を並べると、次のような研究がある。

Marra, Michele. *The Aesthetics of Discontent: Politics and Reclusion in Medieval Japanese Literature*, 1991.

Marra, Michele. *Modern Japanese Aesthetics: A Reader*, 1999.

Marra, Michael F. *A History of Modern Japanese Aesthetics*, 2001.

ところが、現在、英語で出版されている日本美学

に関係ある本は以下のようなものである。

Juniper, Andrew. *Wabi Sabi: The Japanese Art of Impermanence*, 2003.

Gold, Taro. *Living Wabi Sabi: The True Beauty of Your Life*, 2004.

Powell, Richard R. *Wabi Sabi Simple: Create Beauty. Value Imperfection. Live Deeply*, 2005.

Durstun, Diane. *Wabi Sabi: The Art of Everyday Life*, 2006.

Koren, Leonard. *Wabi-Sabi: For Artists, Designers, Poets & Philosophers*, 2006.

Brown, Simon G. *Practical Wabi Sabi*, 2007.

要するに日本美学に興味のある作者は、まだまだ「わび・さび」の呪文から逃れていないように見受けられるが、一方、美学の専門家は、日本現代美学を研究している欧米の文学専門家の影響を徐々に受け、日本現代美学を研究し始め、そして今後も増え続けるであろう。

マルティン・ティララ/プラハ・カレル大学 哲学部東アジア研究所 日本研究学科 准教授